中村哲先生がアフガニスタンで医師としての活動を始めたのは1984年。そして動画当時は2017年なので、活動を開始してから33年もの月日が経っていることになる。ただ当初は現場で医療を提供することで活動されていたが、2000年あたりから現地の病気や争い、そして難民などすべての原因が水がないことに帰着するということに気づき、普通ならば到底無理であろうと考える全長24kmもの用水路を住民と共に築き上げている。そして、元々ほとんど砂漠のようになってしまっていた土地はみるみる蘇り、2015年時点で米や果物、野菜が育ち青々とした緑が生い茂る豊かな土地へと変貌している。

中村哲先生の功績についてある程度は知っていたが、特に素晴らしいと思ったところは、現地の人が利用する・使い続ける・メンテナンスをするということを考えて、非効率的でも現地の方に主体になってもらってこの用水路を作ったことだ。前回の授業でもあったが、開発協力を行う際に実際にその対象地域の人々が主体的に事業を動かすことは、そのプロジェクトやインフラが以後も運用されていくうえで非常に重要な要素だと感じた。しかし、24kmもの用水路を手で掘るには何年もの時間がかかるし、普通の人ならまずやろうと思っても到底できるものではないと思ってしまうだろう。現地の人の心を動かし、そして本当の意味で何十万人もの人に豊かな毎日の生活を取り戻させた中村哲の功績には余人をもって代えがたいものがある。

彼が訴えてきたのは、軍事力や経済力だけでは人は豊かに、平和に暮らしていくことはできないし、人間の思うがままではなく、自然を知りいかに調和していくかが大事なのだということだと思う。中村哲氏は不幸にもタリバン勢力によって銃殺されてしまうことになったが、彼のこの訴えは今も多くの途上国で活動している人たちに受け継がれていると思う。

私自身は、大学卒業後からいわゆるIT企業やスタートアップで働き、まさにテクノロジーに下支えされた経済力があれば、途上国の人々の生活も良くなると考えてきた人間だと思う。例えば、東アフリカにおけるモバイルマネー、M-PESAなどはまさにその代表的な例で、従来は人づてや郵送、自分で手渡しするなどしかなかった現金の送受手段が、電話番号さえあれば少しの手数料で簡単に受け渡しができるようになったのである。現地の技術・生活から見れば一足飛びに進化したサービスが、多くの人に利用され生活を一変させたかのように感じる。もちろんこうした技術発展とその社会への実装も、現地の人々の生活を便利にするという側面はあると思う。しかし、現実的にこうした技術はなにか本質的な富を生み出しているかというとそうではないという見方もできる。実際、モバイルマネーに関する研究では多くの場合、送金に関するコストが減ったため、地方でも消費の平準化が起きているというものである。これ自体は、国の中で富の総量が増えているわけではなく、ただお金が以前より全体的にいきわたりやすくなったということでしかない。

こうした観点で考えると、2050年、今から26年をかけて私がやりたいことは本当にそういったテクノロジーで人々の生活を変えることだろうか。

本質的には、途上国で飢餓や貧困に苦しんでいる人の生活を根本的なシステムから変えたいと思っている。今の資本主義社会が生み出した格差や苦境は、それに苦しんでいる人たちが生み出したものでは決してない。

そのためには、地域社会がしっかり豊かになること、その土地で経済が持続可能な形で維持されることだ。それには、本質的な富を生み出す自然、それが適切な形で維持され利用される仕組み、農業と工業がバランスよく発展していきながら、環境負荷を減らしていくことが求められる。そうした地域をいかにたくさん作れるかが、今後の途上国開発だけでなく、世界中で求められていくように思う。

私は、この世界を金を持てる人、権力を持てる人だけが豊かになる世界ではなく、誰にでもチャンスがあり、自分の好きな形で人生を選び取れるようになってほしいと心から思う。
自身としては、そうしたチャンスを持たない人にチャンスを与えられるようなマイクロファイナンスの事業やNGOの活動を通して、少しでも昨日より良い社会を作りたいと感じた。2050年、あと26年は意外に短い。自分の一日、一時間、一分を何に使うか、改めて考えるべきだなと思う。